

- ① 翻訳には3日かかった。
- ② 大臣は、次第にトヨの意見を聞いたり冗談を言って笑うようになった。
- ③ 1週間後、大臣はトヨに数日後の佛蘭西への同行を打診した。
- ④ トヨは、その話を相沢から事前に聞いていなかった。
- ⑤ トヨは、その打診を予測したので、即座に断った。
- ⑥ トヨは、信頼している人に突然依頼された場合、あまり考えずに即座にOKを出して後悔することがよくあった。
- ⑦ トヨは、翻訳代と旅費をエリスに渡した。
- ⑧ エリスは、正式に新型インフルエンザと診断された。
- ⑨ エリスは、一週間しか休んでいないのに、休みが長引けばクビにすると宣告した。
- ⑩ その厳しい処置は、エリスが相沢の愛人になることを断ったからである。
- ⑪ エリスは、トヨの愛を信じていたので、ロシア行きに不安を感じていなかった。
- ⑫ トヨは、駐車場でエリスが泣くと困るので、エリスと母を知人の家にやり、一人で旅立った。
- ⑬ トヨは、巴里絶頂の贅沢を尽くした魯西亞のペエテルブルクの宮殿で、得意の仏蘭西語で通訳の役目を忠実に果たした。
- ⑭ トヨは、この間すっかりエリスのことを忘れていた。
- ⑮ エリスの1通目の手紙は、一人で暮らすことの心細さが切々と書いてあった。
- ⑯ エリスの2通目の手紙は、「ティアー、トヨ」で始まっていた。
- ⑰ トヨは、日本に身寄りがないので、独逸で生活できるなら留まると言っていた。
- ⑱ エリスは、金の力でトヨを独逸につなぎ止めるつもりだと書いた。
- ⑲ もしトヨが日本に帰るなら、母と付いていきたいが、飛行機代がないと書いてあった。
- ⑳ 独逸でトヨが出世するのを期待していると書いてあった。
- ㉑ トヨが旅立って一カ月後、別れの寂しさは日増しに強くなると書いてあった。
- ㉒ 食べ過ぎでお腹が大きくなったので、絶対絶対捨てないでと書いてあった。
- ㉓ 母はエリスの成長を見て、独逸の片田舎の親戚の所に身を寄せることになったと書いてあった。

- ②④ 相沢の信用を得たなら、エリスの旅費は出してくれるだろうと書いてあった。
- ②⑤ トヨは、エリスの1通目の手紙で、初めて自分の地位に気づいた。
- ②⑥ トヨの決断力は、順境で働いたが、逆境では働かなかった。
- ②⑦ トヨは、大臣の信用が出世につながることを計算して、翻訳の仕事を忠実に果たした。
- ②⑧ トヨは、自分の地位を知ってヤッターと思った。
- ②⑨ 相沢は、トヨが大臣の信用を得つつあることを知っていたが、公の事なので言うに言えず、ヒントを出していたが、トヨは気づかなかった。
- ③⑩ 相沢は、トヨがエリスと別れると約束したことを、速攻で大臣に伝えていた。
- ③⑪ トヨは、自我の目覚めが本物であることに気づいた。
- 32 トヨの自由を束縛していたのは、昔は母、今は相沢である。
- 33 トヨがベルリンに帰ったのは、大晦日の夜である。
- 34 エリスは、悲しみの余り、人目をはばからずトヨに抱きついた。
- 35 トヨは、エリスと再会する前は、望郷の念と出世欲の方が、愛情より強かった。
- 36 トヨは、エリスと再会した後も、望郷の念と出世欲は強かった。
- 37 エリスがトヨに喜んで見せたのは、白い木綿のハンカチーフだった。
- 38 エリスはトヨにお腹の子の認知を迫った。
- 39 エリスは、赤ん坊が教会で洗礼を受けることが悲しくて泣いていた。